

学位請求論文審査報告要旨

2019年2月13日

申請者 佐野彩子

論文題目 ビジネス分野における外来語の諸相

ー企業の年次報告書（アニュアル・レポート）に着目してー

論文審査委員 石黒 圭

山崎 誠

田中 牧郎

1. 本論文の内容と構成

専門日本語教育は、日本語学習者が特定の専門領域に参加し、活躍できるようになるための日本語教育の一分野である。専門日本語教育のなかでも、とくに研究が盛んな領域は、大学等で学ぶ学生のための学術日本語教育と、社会で働くビジネスパーソンのためのビジネス日本語教育である。しかし、後者のビジネス日本語教育を研究する場合、研究素材としてのビジネス文書の入手が困難であるという問題がある。ビジネス活動は機会損失や利益逸失を避ける必要があるため、ビジネス文書には秘密保持義務が伴い、ビジネス文書は外部に公開されにくい性格を備えているからである。

本論文は、企業の年次報告書（アニュアル・レポート）という外部に公開されているデータに着眼し、そのデータベース化を行い、業界ごとのビジネス専門語の特徴を明らかにすることを旨としたものである。とくに、近年の産業のグローバル化によって重要度が増している外来語に焦点を当て、使用頻度、使用範囲、語構成、個別の用法など、多面的な角度から、ビジネス分野で使用されている外来語の特徴を明らかにしようとしている点に特徴がある。

本論文は、全11章からなる。その構成は以下の通りである。

目次

第1章 ビジネス文書における外来語研究の試み

1.1 本研究の目的

1.2 本研究の方法と構成

第2章 先行研究と本研究の位置付け

2.1 外来語に関する先行研究

2.2 外来語の語彙調査に関する研究

2.3 専門語彙に関する先行研究

2.4 ビジネス日本語に関する先行研究

- 2.5 本研究の位置づけ
- 第3章 研究対象とするビジネス文書
 - 3.1 ビジネス文書と年次報告書（AR）の位置づけ
 - 3.2 年次報告書（AR）とは
 - 3.3 本研究の方法
- 第4章 年次報告書（アニュアル・レポート）における外来語の特徴
 - 4.1 調査対象
 - 4.2 量的特徴
 - 4.3 業界毎の特徴語の抽出
 - 4.4 特徴語の概要
 - 4.5 特徴語のまとめ
- 第5章 「ビジネス共通語」の特定
 - 5.1 業界特徴語と語彙の専門性の問題
 - 5.2 「ビジネス共通語」の選定
 - 5.3 「ビジネス共通語」の日本語教育への示唆
- 第6章 用語分析①「リスク」
 - 6.1 「リスク」の辞書における定義
 - 6.2 「リスク」の意味と用例数比較
 - 6.3 「リスク」と共起する用言類の特徴
 - 6.4 「リスク」の複合名詞
 - 6.5 「リスク」のまとめと考察
- 第7章 用語分析②「マネジメント」
 - 7.1 「マネジメント」に関する先行研究
 - 7.2 「マネジメント」の統語的特徴、複合名詞、意味的特徴
 - 7.3 「マネジメント」と類義語との比較
 - 7.4 「マネジメント」のまとめと考察
- 第8章 社会科学専門文献の外来語
 - 8.1 社会科学専門文献とは
 - 8.2 社会科学専門文献における高頻度語
 - 8.3 社会科学専門文献における共通語彙の語構成
 - 8.4 社会科学専門文献の外来語についてのまとめと課題
- 第9章 ビジネス分野の語彙と他ジャンル（AJ、白書・新聞）の語彙との比較
 - 9.1 ビジネス広範囲語
 - 9.2 ビジネス広範囲語の調査
 - 9.3 ビジネス広範囲語の調査結果
 - 9.4 他ジャンルの語彙との比較のまとめ

第10章 留学生への語彙教育に関する試案

10.1 留学生を取りまく環境

10.2 就職支援のサービス

10.3 アカデミックジャパニーズ (AJ) からビジネスジャパニーズ (BJ) へ

10.4 「AJ語」と「BJ共通語」の調査結果

10.5 BJの複合名詞に関する特徴

10.6 ビジネス日本語教育への示唆

第11章 まとめと今後の課題

11.1 本研究のまとめ

11.2 本研究の今後の課題

語彙表

付記

参考文献

本論文のもとになった既発表論文

2. 本論文の概要

本論文は、ビジネス分野における外来語の使用の特徴を明らかにすることを目的として、企業が作成・発行している年次報告書（アニュアル・レポート）を分析対象に設定し、使用されている外来語を量的・質的な観点から分析・考察し、さらに、そこで得られた知見から、ビジネス日本語教育への応用について試案をまとめたものである。

以下、こうした全体の流れを踏まえ、各章の概要を順に紹介する。

第1章では、筆者が自分自身のビジネス経験を踏まえ、ビジネス日本語研究、とくに外来語の語彙研究に着手した動機、およびその研究資料として、企業が作成している年次報告書（アニュアル・レポート、以下AR）の選定に至った経緯が語られる。また、このあとに続く本文全体の構成が示される。

第2章では、本論文が参考にした先行研究が四つに分けて紹介される。第一は外来語を総合的に扱った研究であり、外来語使用の特徴や効果、弊害などについて論じた研究を紹介している。第二は外来語の語彙調査に関する研究であり、新聞や雑誌の語彙調査研究を一通り眺めたうえで、抽象的な意味を持つ外来語の基本語化が起きているという指摘を行った先行研究を示している。第三は専門語彙に関する研究であり、学術分野の語彙抽出研究を概観したのち、学術分野以外の医療分野・行政分野などの語彙抽出研究にも言及している。第四はビジネス日本語に関する研究であり、ビジネス日本語の多様な研究や実践を紹介したうえで、ビジネス語彙研究の不足を指摘し、この四つをまとめる形で自身の研究の位置づけを行っている。

第3章では、多岐にわたるビジネス文書のなかで、ARがどのように位置づけられるかが詳細に論じられている。とくに、分析対象とするビジネス文書を選択するにあたり、①ビジネスの現場で、実際に作成された文書であること、②一人の社員が実際に目にする身近な文書であること、③合法的な入手が可能な文書であること、④内容に企業活動の網羅性がある文書であること、の4点を考慮したことが述べられ、ARが体外的に公表され流通している資料であり、合法的な入手が可能であるほか、1年間の企業活動の報告資料という性格上、特定の事業や商品広報等よりも内容面で網羅性があり、直近の企業活動の実態を反映した語彙を得られることが期待できる点が強調されている。

第4章では、ARに出現する外来語の特徴を分析するにあたり、まず、分析対象になった資料の選定基準が示されている。分析対象には、東京証券取引所の「TOPIX Core30」（時価総額・流動性の特に高い企業30社で構成された株価指数）に指定されている企業から、日本の主要産業である製造業を中心に6業界（自動車・銀行・情報通信・医薬品・商社・電機）16社の5年分のARを選び、ビジネス・コーパスが作成されたことが示されている。次に、分析結果が示され、外来語の語数は、延べ語数では全体の7.6%を、異なり語数では14.1%を占めていたとされる。また、高頻度語や広範囲語の調査結果が示されたのち、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下BCCWJ）の書籍を参照コーパスとし、対数尤度比を用いて抽出した業界ごとの特徴語に、各業界の製品や材料等のモノを指す語彙に加え、技術開発、企業経営形態や業務内容を指す外来語、「パイプライン」や「ドライバー」のように業界ごとに異なる意味をもつ語が含まれていたという興味深い指摘がなされている。

第5章では、「ビジネス共通語」を中心としたビジネス語彙の整理が提案されている。抽出された業界ごとの特徴語の中には、複数の業界に共通して抽出された語と、特定の業界にのみ抽出された語が存在するとされ、そのうち、複数の業界に共通して抽出された特徴語を「ビジネス共通語」、該当する業界のみに抽出され、「留学生の日常生活からの距離が近い語」（BCCWJの頻度順位が高い語）を「業界一般語」、「留学生の日常生活からの距離が遠い語」（BCCWJの頻度順位が低い語）を「業界専門語」と再分類することが提案されている。「ビジネス共通語」の割合は、すべての業界で業界特徴語の7割前後である一方、情報通信業界や電機業界では「業界一般語」が、銀行業界では「業界専門語」の割合が高かった。その背景として、情報通信業界や電機業界では日本語に定着しているIT関連語彙が多い一方、銀行業界の金融取引に関する語は、日常生活の中ではあまり馴染みのない専門性の高い語彙が多いことが示されている。

第6章と第7章は個別の用語分析であり、ビジネス・コーパスにおいて高頻度語であり、興味深い振る舞いをする語が分析されている。第6章では「リスク」が取りあげられ、共起表現や複合語構成、類義表現等を中心に分析が施されている。「リスク」がもつ経済的損失の可能性とは、「リターン」（プラス）とひもづいた損失可能性（プラス方向

に可變的なマイナス)であるのに対し、類義語の「危険」「危険性」には「リターン」の可能性という意味を持たないという違いがあるとされている。

第7章の「マネジメント」では、統語的特徴に加え、ARの内部構成における出現位置に着目し、異なる語種の類義語との使い分けが分析されている。類義語との使い分けでは、ARの見出し語には「マネジメント体制」、具体的な事案に対する企業内の「管理」ならば「管理体制」、経営者自身の口から発信されるのは「経営体制」というように、ARの構成項目に応じた使い分けがみられたとされる。「マネジメント体制」(外来語+漢語)のように他語種と複合語を構成する外来語の複合語機能には、表記面の分かりやすさやその視覚的なインパクトから「見出し効果」があるという興味深い指摘も見られる。

第9章では、ビジネス分野の語彙と他ジャンルの語彙との比較が行われるが、第8章ではその前提として、学術日本語である社会科学専門文献の外来語が分析されている。具体的には、社会科学専門文献における外来語について、学術分野ごとの語種比率や高頻度語、また、学術分野に共通する高頻度語について、複合名詞の語構成の観点から検証されている。社会科学専門文献における外来語の語種比率は、商学が高く、法学では少ない。また、法学の語彙は頻度順位が最も高く比較的馴染みのある語が多いと考えられる一方、国際政治学は頻度順位が最も低く日常あまり使用されない馴染みのない語が含まれ、それ以外の商学、社会学、経済学は、その中間に位置するとされている。さらに、学術分野に共通する高頻度語の複合名詞の語構成では、どの分野においても「漢語+外来語」の語構成をとる複合名詞が最も多いが、商学や社会学では「外来語+外来語」の複数の外来語で構成された複合名詞、経済学では「二字漢語+外来語」、国際政治学では「四字漢語+外来語」により構成された複合名詞の比率が高かったとされている。

第9章では、ビジネス分野の広範囲語と、社会科学専門文献の商学、経済学、BCCWJの白書、新聞の出現頻度上位100語が比較され、相対的な位置関係や重なり、非重なりが検証されている。BCCWJの頻度順位データをもとに、各ジャンルの語彙の平均順位をみると、ビジネス分野の広範囲語は、新聞・白書よりも順位が下がるが、商学・経済学よりも上位に位置したとされる。ビジネス分野の語彙は、白書や新聞のように公共性の高さという点で外来語が抑制的に使用されている媒体と比較すると、専門性の高い語彙が含まれているものの、商学や経済学ほど専門性の高い語彙が含まれているわけではなく、およそ中間に位置していると結論づけられている。また、ビジネス分野において、高頻度の複合名詞には、前項に外来語の事業名、後項に漢語の組織や分野の名称を組み合わせる事業内容や組織名を指す複合名詞(「一事業」「一業務」「一分野」等)が多い点や、情報通信業界では外来語同士の結合した複合名詞が多いという特徴がある。また、「ビジネス共通語グループA」(全6業界に共通して抽出された特徴語)のほとんどが複合名詞を構成して使用されるが、そのなかで、語彙素レベルの単独一語として用いられることが多い語の一例として「ビジョン」が挙げられ、「ビジョン」の用例には、カタカナの持つ視覚的な

インパクトとしての「見出し効果」の他に、括弧等の装飾と組み合わせて特別な意味を持たせる等、修辭面での特徴が多く見られたとされている。

第 10 章では、ビジネス日本語教育への示唆として、就職活動を控えた留学生に対してはアカデミックジャパニーズ (AJ) からビジネスジャパニーズ (BJ) へのアーティキュレーション (連続性) を考慮した教育方法が提案されている。前章の分析結果を踏まえ、「AJ 語」と「BJ 共通語」双方に共通する語 ⇒ 「BJ 共通語」⇒ 留学生が就職を志望する業界の「業界専門語」へと段階的に語彙学習を進めていくことが学習者の負担が少ないとされている。また、語彙の提示は「ビジネス」という大きなまとまりではなく、その下位にある仕事の分野を指す意味カテゴリーごと (財務・会計、情報 IT、企業統治等) にまとめ、語彙の確認、理解を実際の企業活動の理解へとつなげていくことも示されている。さらに、外来語の多くが複合名詞を構成して使用されることから、複合名詞を構成する語の意味や語種を関連付けながら、同種の語構成ごとに体系立てて提示することも重要であると指摘されている。

第 11 章では、それまで述べてきた内容が簡潔にまとめられ、今後の研究課題が示されている。

3. 本論文の成果と問題点

本論文は、企業の年次報告書 (アニュアル・レポート) のデータベースに基づいて、ビジネス日本語に出現する外来語の特徴について、量と質、両面から分析が行われた完成度の高い論文である。その成果は、大きくは次の 3 点にまとめられる。

第一は、これまで収集が困難であるとされてきたビジネス日本語の資料の選定にあたり、アニュアル・レポートに着眼し、ビジネス・コーパスを作成した点である。資料の代表性や業界のバランスに配慮しながら、約 140 万語にも及ぶビジネス・コーパスを独力で作りあげた労力も評価に値する。

第二は、量的な分析手法の再現性が高い点である。本論文は、上述のビジネス・コーパスをもとに、ビジネスにおける業界ごとの特徴語を客観的な手法で抽出し、分析を行っている。その結果、どの業界でどの外来語がよく使われているのか、その重なりと異なりが明らかになり、業界横断的なビジネス共通語と業界ごとの特徴語の見取り図が可視化されている。また、社会科学分野の学術日本語との比較、さらには新聞・白書との比較によって、ビジネス日本語における外来語の位置づけが明確になった点も評価できる。

第三は、質的な分析手法の着想が鋭い点である。「リスク」と「マネジメント」を扱った章では、類義語との使い分けの原理や、レトリック上の効果などが明らかにされ、興味深い。また、章としては立てられていないが、「ドライバー」や「パイプライン」の多義性や、「ビジョン」の語構成上の特徴など、個々の語をめぐる興味深い指摘も散見される。

こうした量と質、両面からの丁寧な分析によって、これまでのビジネス日本語研究を大きく進展させ、専門日本語語彙教育に対する多くの示唆を与えることが期待されよう。

一方、こうした優れた点を備えた本論文にも、問題点が存在する。

第一は、ビジネス分野の外来語の特徴を明らかにする場合、すべての語種を対象に特徴語を抽出し、そのうえで外来語に絞って分析したほうが外来語の特徴がより明確になったのではないか。分析対象を当初から外来語だけに絞ってしまうと、外来語内部の共通点や相違点は明らかになるが、外来語外部の、とりわけ類義の漢語との競合や棲み分けが見えにくくなるうらみがある。そのため、今回の資料における語彙の全体像を明らかにしたうえで、外来語に特化して分析をするという二段階の分析手法も考慮すべきであったと思われる。

第二は、資料の選定の問題である。アニュアル・レポートを中心資料に据えたのは炯眼であるが、その特徴を明らかにするために用いた比較資料には、やや疑問が残る。とくに、特徴語抽出の際の参照コーパスが BCCWJ の書籍だけである理由が判然としない。本論文でも指摘があるように、書籍データの一部にビジネス関連書籍が含まれるし、「日常生活からの距離」を図る場合、BCCWJ 全体を比較の対象にすることが考えられてもよかったのではないか。

第三は、誤解を招きやすい表現である。「語彙数」という語がしばしば用いられているが、本論文の内容から考えて「語数」のほうが誤解を招かないのではないか。また、「業界一般語」という名称も、「業界一般で使われている語」ではなく、「業界特有の語で、かつ一般でも使われる語」という意味には取りにくいと思われる。

しかし、これらの問題点は、本論文の達成した高い学術的成果を損なうものではない。また、こうした問題点については、第 11 章の「今後の課題」にも見られるように、著者にも十分な自覚が見られ、今後の研究のなかでの解決が俟たれるところである。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
山崎 誠
田中 牧郎

2019年1月31日、学位請求論文提出者、佐野彩子氏の論文「ビジネス分野における外来語の諸相－企業の年次報告書（アニュアル・レポート）に着目して－」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、佐野彩子氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、佐野彩子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。